広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習 : 小学校で〈教育実習を顧みて〉
Author(s)	山本, 美代子
Citation	広大言語 , 8 : 50 - 51
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046295
Right	
Relation	

英語の授業で感じたこと，それは何といっても外国語を教えることの難しさであったと思います。中学校1年生の授業は特にそういったことが問題となります。むろん母国語教授の場合にはそれなりの困難が伴うであろうことは否めませんが。

今まで教えてもらう立場にあった私が，二週間，教育実習を通して，逆の立場で生徒と対決したわけですが，二度と帰らない思い出を，いつまでも大切にして，今後の参考にしたいと思っています。

教育実習 ―― 小学校で ――

山　本　美代子

6月15（土）～22（土）日までの一週間，先ずは小学校での教育実習があった。先輩や友達から聞いたところ，付属の生徒は，大分教生ずれしているから，手恐いということだった。私が何よりも心配したのは，大きな小学生に上から見下すようだと，それこそ一度で自信を失くしはしないかという事だった。最初に見た学生は一年生だった。教室に入った途端，何か小人の国にいるような，小さい彼らが丸で私達の足下で目まぐるしく動き回っているような，そんな感じがした。何て小さいんだろう！とても可愛らしかった。だが，尚も不安だった。私の教えるのは，小学生でも五年生なのだ ―― 月曜日，いよいよ五年生に会うのだ。前にずらりと並んで9人の教生が自己紹介，その後生徒が1人1人席を立って自己紹介してくれた。その間に少しづつ気分が落着いてきたので，目を上げて生徒を追って見た。中には，しっかりしたことを言う子がいたり，人を悠々と笑わせたりして私も気分がぐっとほぐれて，それが終ると，一通り皆を見ることが出きた。それでほっと安心した。小学生は小学生だ。子供らしく独特のユーモアで，紹介も上手だなあと思った。ところが次の時間，先生は，叱られたのだ。私は，少々ふざけても，それはそれで面白く，好ましい紹介だと，むしろ感心していたのだが，礼の仕方の悪かった子，声の小さかった子，真面目でなかった子等，いずれもやり直しを命ぜられた。私自身，そういわれてみれば1つ1つ思い当るような，まずい紹介だったのだ。その時，小学校にいる事を強く感じた。その厳しさに，今まで漫然と物事を見，行っている自分を感じて，深く反省させられたと同時に，私は今，教生として来ているのだと自覚した。休み時間になると生徒の方から話しに来てくれた。彼等が何をどんな風な目で見，どんな風に受けとめ考えているのか，丸でつかめなくて，躊躇する事が多かった。ただひどく可愛らしく思えた。皆，案外素直だと思った。ここでは，出来る子，そうでない子の差があまりないようだった。我々の時には，かなりはっきりしたランクがあったようだが…。しかし1人特殊化した子

（こ）がいて，いつも皆に逆らっては，問題をおこしているみたいだった。その子は体が弱くて，半年位遅れているので何か皆に対して弱気な所を持っていた。ひようひようとして，おどけた風でもなく，しかも往々，何か動作の１つ１つがとびぬけたような所があった。ホーム・ルームの時だったか，掃除について話し合いが行われた。その子がいつも班長のいう事を聞かない，と訴えられた。ノラクラしていると責められた。皆が彼に迫った。彼は１人弁解にならない事をひようひようと云うだけで，話し合いが進まなかった。皆の非難が一斉に彼に向けられていた。時間がなかった。その時，先生が，こうおっしゃった。「Aは決して掃除をなまける子ではないと思いますよ。班長の言う事を聞いたかどうかは，わかりませんが …。皆がベルがなって掃除道具も片づけず，さっさと行った後からAは一人でバケツやゾーキンを片づけていたり，掃除の始まる前から机を後に運んでいたり，先生は，Aは掃除好きなんだと思っていますよ」と静かに，きっぱりと言われた。皆シーンと静まって，緊迫していた空気がなごむのを感じた。その後はもう皆，普通だった。その日の放課後，次の日私が教壇に立つので少し居残って，板書をどうしようかと，一度教室へ行ってみようと思って戸を開けた。Aが１人黒板消しを両手にもって黒板をふいていた。私は，先生と生徒の美しいやりとりを見た気がして，すっかり感動した。又その日丁度早退けした子で，いつも一人Aをかばってやっている隣りの席の子がいた。二人のやりとりも実にほのぼのとして，又頼もしかった。もう一つ，最後に，私の教育実習で得たことは，友達を見つけた事だ。彼女も私も皆から言わせると理想主義なのだろうである。いつも夢を描く。もう捨てかけようとした夢，子供らしい夢を，久しぶり，純粋で単純な世界に触れて，お互い取り戻し，勇気を得た。同じような友がいたことが嬉しかったし，いつまでもこの心は忘れまいと，約束した。とても思い出深い小学校の教育実習だった。

「書評」 De Mauro, T.: Storia linguistica dell' Italia unita, Bari, 1963

古　浦　敏　生

§1　著者の横顔

De Mauro, T. 氏は，１９５６年に Roma 大学で学位を取られ，現在，Roma 大学文学部言語哲学の助教授で，１９６１年以来，同大学の言語学の併任講師もしておられる。そして，多くの専門雑誌に一般言語学或は言語哲学の論文や書評をのせておられ，さらに，シンタクス研究，史的意味論，古代現代諸言語の比較研究など，幅広く活躍しておられる。